授業に対する没入感や不自由さが授業時間の長さのイメージに及ぼす影響

高橋 雅子・沖林 洋平（教育学部）

コロナ禍におけるこれまでの研究

歌えない子どもたちの心理的ストレスに関する研究
（2020年度調査：附属山口小・中学校の児童生徒405名対象）

2020年度の小・中学校の授業

休校や歌唱を制限された対面授業

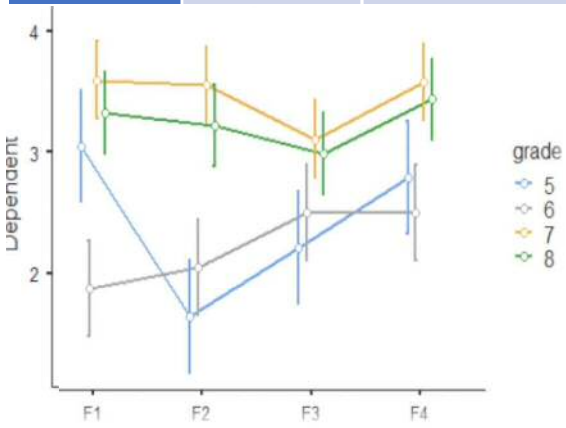
【表１　因子分析結果】

因子	命名
因子１	歌えない現状に対する認識
因子２	歌えない不自由感・歌いたい欲求
因子３	歌うことに対するメタ認知
因子４	感染予防に対する意識・ストレス

コロナ禍で歌唱が制限されていることに対するストレス

【表２　各クラスタにおける「歌うこと」の好意度・授業外の歌唱行動の変化量】

	クラスタ	「歌うこと」の好意度	授業外の歌唱行動
N	1	268	268
	2	37	37
	3	69	69
平均	1	-0.16	-0.09
	2	1.41	0.54
	3	-0.07	1.09
標準偏差	1	0.46	0.31
	2	0.69	0.87
	3	0.26	0.28



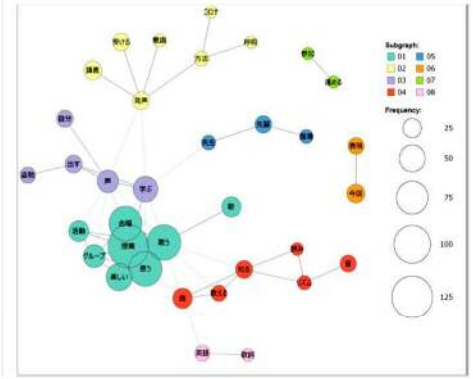
72%は「歌うこと」に対する好意度と授業外の歌唱行動に変化がなく、28%に何らかのネガティブな変化が見られた。

【図１　歌うことの好意度が変化したクラスタの各因子】

コロナ禍における合唱活動の不自由感に関する研究
（2020・2021年度調査：山口大学共通教育受講生対象）

2020年度の共通教育（合唱）

オンライン（Zoom）による単旋律の歌唱

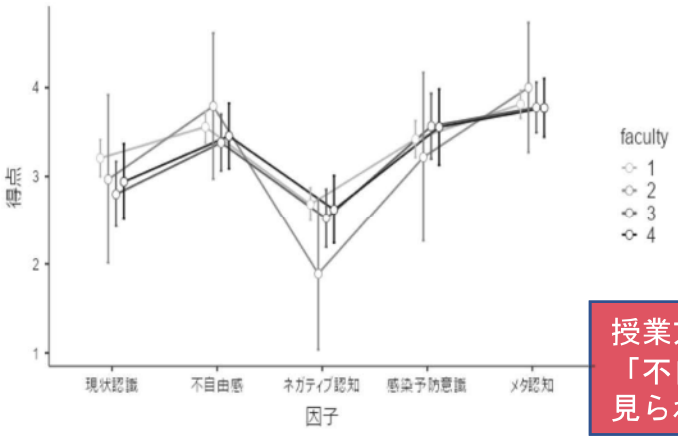


「Zoomの困難さ」は低く、「深い学び」「協同学習」「楽しい合唱」を達成できた。

【図２　自由記述の共起ネットワーク】

2021年度の共通教育（合唱）

Q1 ハイブリッド型（教育学部）
Q2 対面（理学部、工学部、人文学部）



1　教育学部
2　理学部
3　工学部
4　人文学部

授業方法による学生の「不自由感」に違いは見られなかった。

【図３　学部による因子の得点】

方　法

調査時期　2020年後期から継続中
調査手続き　調査対象授業の授業者に連絡，授業後学生がQRコードを取得し調査用サイトで回答
質問項目　1．授業の印象評定5項目，2．授業時間の長さイメージ1項目，実際の時間の回答1項目

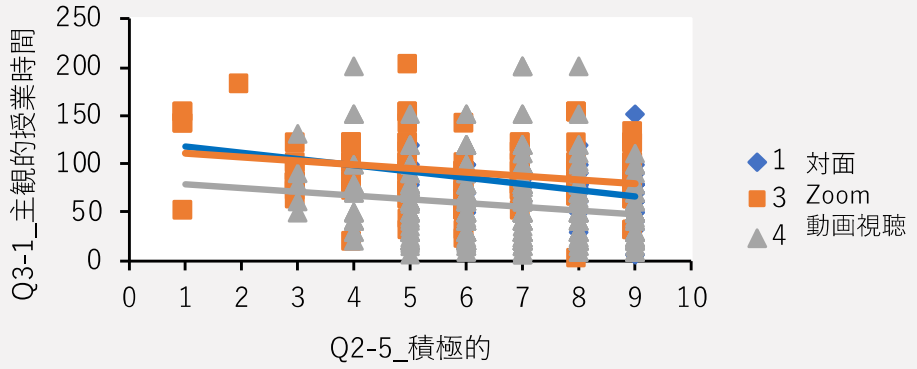
2020年度後期と2021年度前期の調査対象授業の度数

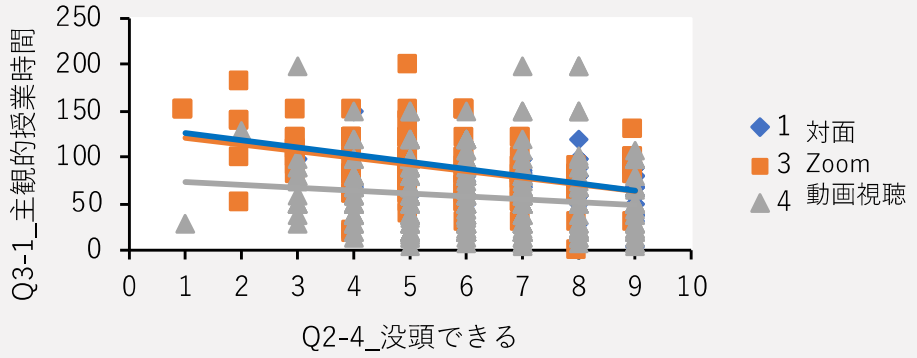
	2020年度後期		2021年度前期	
	N	%	N	%
対面講義	70	10.7	641	51.08
対面実習	5	0.76		
Zoom	117	17.89	56	4.46
動画視聴	399	61.01	558	44.46
学外	1	0.15		
その他	62	9.48		
合計	654	100	1255	100

2020年度後期と2021年度前期の授業に対する評定値

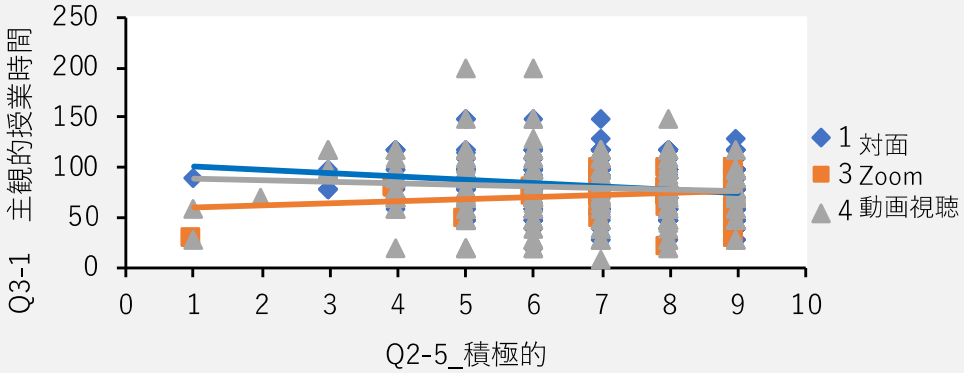
	2020年度後期			2021年度前期		
	N	平均値	SD	N	平均値	SD
Q2-1_面白い	586	6.50	1.65	1255	7.09	1.48
Q2-2_わかりやすい	586	6.71	1.63	1255	7.08	1.53
Q2-3_聞き取りやすい	586	6.94	1.67	1255	7.12	1.50
Q2-4_没頭できる	586	6.27	1.73	1255	6.98	1.56
Q2-5_積極的	586	6.70	1.64	1255	7.23	1.46
Q3-1_主観的授業時間	586	65.96	37.19	1241	79.58	22.66

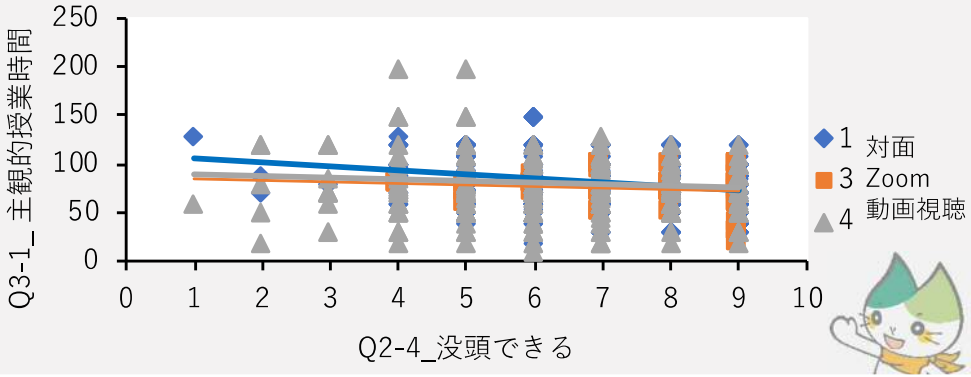
授業時間の長さイメージと印象　2020年度後期





授業時間の長さイメージと印象　2021年度前期





山口大学研究プロジェクト
コロナの時間学　～新型コロナウイルスが人間と社会に対して与える時間的影響～

研究成果報告書

主研究者	高橋　雅子	所属	教育学部
共同研究者	沖林　洋平		

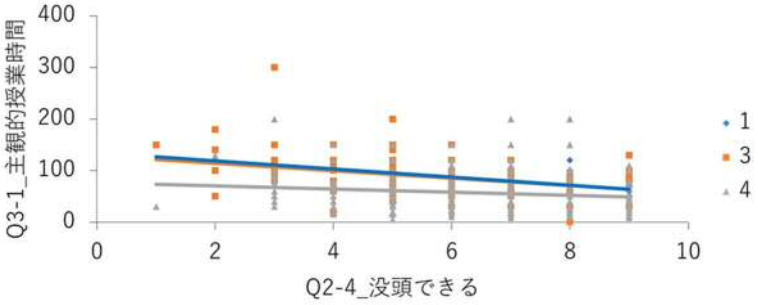
研究課題名

授業に対する没入感や不自由さが授業時間の長さのイメージに及ぼす影響

研究内容と成果の概要

コロナ禍以前から行ってきた尺度開発の研究を踏まえ，筆者らは，2020 年度にオンライン授業における学生の不自由感について調査を行った(高橋・沖林，2021)。一方，歌唱活動を制限されていた教育学部附属山口小学校と同山口中学校の児童生徒を対象として，コロナ禍における合唱活動に対する不自由感に関する心理モデルの作成を目的とした調査を行った(高橋・沖林，2021)。調査の結果，児童生徒が感じる不自由感には，「歌えない現状に対する認識」，「歌えないストレス」，「歌えないことへの不満感」，「歌うことに対するメタ認知」があることが示された。この結果を踏まえて，大学生を対象として，マスクを着用しながら対面（一部オンライン）で合唱活動を行う大学授業での不自由感に関する調査を行った(高橋・沖林，2021，印刷中)。その結果，「歌えない現状認識」，「歌えない不自由感」，「歌えないことへのネガティブ認知」，「感染予防意識」，「歌うことのメタ認知」の 5 つの因子が検出された。以上の 2 つの研究は，発達段階にかかわらずコロナ禍における合唱活動は，児童生徒や学生の合唱活動に対する不自由感を高めていたことを示唆するものである。

以上のような背景に基づき，本研究では，オンライン授業に対する没入感と授業時間の関係を検討する調査を行った。本 PJ の枠組みを利用して，教育学部だけにとどまらず，様々な方法の授業の担当教員に協力していただくことができた。受講者は，受講した授業の終了後に授業に対する没入感に関連する項目と主観的な授業時間に対する項目に回答した。2020 年度は，650 サンプル，2021 年年度前期は 1200 サンプルを収集した。図 1 には，対面授業，Zoom，動画視聴の授業方法を比較して，授業に対する没入感と主観的な授業時間の関連を示した。凡例の 1 は対面授業，3 は Zoom，4 は動画視聴の方法である。対面授業と Zoom は没頭することで授業時間を短く感じるようになるのに対し，動画視聴の場合は没頭と主観的授業時間に関連は見られない。



【図１　授業に対する没入感と主観的な授業時間】

研究進捗状況・研究成果の公表状況等 論文、学会等発表、実データの利用状況、研究の有用性を広めるための活動など
2020 年度の 650 サンプルによる調査結果では，対面形式や Zoom を用いた方法では，授業に対して没頭した感覚を持つことや授業を楽しむことが，授業時間を短く感じさせることが示された一方で，動画視聴による授業では没頭した感覚と授業時間の長さイメージには関連が見られないことが示された。この結果は，対面授業，オンライン授業，オンデマンド授業またそれらの複合的な授業形式では，授業に対する没入感と授業の時間的イメージには異なる関連性が見られることを示唆している。 本研究の成果については，音楽教育や心理学領域での研究発表を予定している。小中学校や高校にも一人一台のタブレット端末が導入されることになったこともあり，今後は教育活動とインターネット技術はより密接になることが予想される。今後は，学習者の授業への没入感をより簡便に測定できる手法の開発を目指す。また，筆者らの所属する教育学部は，講義形式の授業のほか，学生がフィールドに赴いて児童生徒や地域住民と関わる活動など多様な方法による教育活動が行われる。本研究で開発した授業への没入感に対する簡便な測定手法を応用することで，これまではノートテイキングの質的分析などで行われてきた講義室の外での学びに関する量的データの蓄積が可能となる。